

山沿いの農地に建てたビニールハウス3棟で、小指ほどのズッキーニ、小松菜や水菜のベビーリーフを栽培する。あらゆる機器をネットワークにつなげる「モノのインターネット(IoT)」と呼ばれる技術を駆使。室内の温度や湿度をコンピューターで管理する。

「世界最先端の研究向けに培ったノウハウで農業効率化のお手伝いできれば」。佐用町大畑の出身。ブドウ園を営む両親を見て育った。佐用高農業科、東京農業大を経て「面白そうなことがしたい」と実家近くの大型放射光施設「スプリング8」を運営する理化学研究所で研究補助に。計測器に関心を深め販売会社に就職。専門知識を培って2009年に起業した。

社名の「ジーン」は遺伝子、「コヒーレント」は物理学の用語で位相がそろった状態を意味する。「ライフサイエンスから物理学まで幅広い科学分野をカバーする」との思いだ。研究者の要望に応え、必要な機能に特化した計測器の製造も行う。

新展開として今年4月、農業法人「日本果菜」を設立した。アジア向けに野菜を輸出する構えだ。

「同じ事業形態を続けていては10年先は生き残れない。常にイノベーションが必要だ」。センサーや制御技術を応用、ハウスの温度調整や放水を自動で行う効率的な農業生産を目指す。手頃な値段でシステムの販売も狙う。

約10人の社員たちは子育てや家事を優先。IoTを活用し、仕事のスケジュールを調整する。「地元の誇りになるような企業に成長したい」
(敏蔭潤子)

IoT駆使 農業を効率化

播磨びと

ジーン・コヒーレント社長

かげやま ゆういち
影山 裕一さん(36)

佐用町三日月

